AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録（2014.12）平成２５年度:91.

患者が望む病名及び病状における告知の実態調査

内藤 理沙, 横井 由紀子

患者が望む病名及び病状における告知の実態調査

旭川医科大学病院　６階西ナースステーション　　内藤　理沙、横井由紀子

【目的】

患者が病状について、余命、再発、抗がん剤治療の限界など厳しい内容の告知を受けたいと考えているのか実態調査をし、看護の示唆を得る。

【方法】

研究対象は、がん疾患以外の患者 30 名で質問紙の内容は余命・再発・治療の限界などとし、アンケートを実施した。倫理的配慮はＡ病院倫理委員会の承認を得て書面と口頭で趣旨を説明し同意を得た。

【結果】

患者 30 名から回答が得られ、がんと診断された場合、病名告知を希望するものは 29 人で、余命告知を希望するものは 24 人であった。再発の告知を希望するものは 27 人で、抗がん剤治療の限界の告知を希望するものは 25 人であった。

【考察】

自由記載の項目から患者は余命や再発、治療の限界などの厳しい告知について「生も死も受け入れる。」「すぐに死に至るものかで迷いがある。」という表出があった。これは個人のこれまでの人生経験や死生観などが影響していると推測される。小野は「患者は何をどこまで知りたいと思っているのか、患者の日常生活ケアを通して把握し、何をどのように伝えればいいのか考える必要性がある。」と述べている。以上のことから看護師は病名告知の前に、患者・家族とコミュニケーションをとれる環境を整え、患者のおかれている状況を早期に把握することが重要と考える。看護師は厳しい内容の告知の有無に関わらず、患者の知りたい情報は何であるかを把握し、医師、家族と連携を図りながらサポート体制を整えていく必要がある。本研究は非がん患者を対象とした調査のため、がん患者を対象とした場合は、相違がある事が予測される。

【結論】

過半数以上の患者が自分の余命、再発の有無、抗がん剤治療の限界などの情報を知りたいと回答していた。看護師は病名告知の前に患者の知りたい情報は何であるかを把握し、医師、家族と連携を図りながらサポート体制を整えていく必要がある。